「半生をかえりみて」翻訳（1）——試練の到来——

矢次綾*

A Translation of "Half a Life-time Ago"(1) : Trial Coming

Aya Yatsugi

第一章

老人たちが前途洋々の若者だったころ、ウェストモーランド[1] の丘陵地域にスーザン・ディクスンという名の独身女性が住んでいた。居住している小さな家屋と、その周囲に広がる三十エーカーだか四十エーカーだかの土地持ちであった。牧羊場を相続する権利も所有していたが、その牧羊場は荒野へと続き、その荒野はブリー湖にまで伸びていた。その地方の言葉を使えば、彼女は女地主である。彼女の住んでいた家は今でも、スケルウィズとコニストンを結ぶオクスンフェル街道から見える。オクスンフェルから泥炭を求めて時折やって来る荷馬車が、荒野につけた轍をたどってみるとよい。その横を、さらさら、ばしゃばしゃと流れる一筋の小川が、まるで誰かと一緒に道を歩いているような気分をかもし出し、辺りを包む深い孤独感を軽減する。スーザンの農場は、コニストンからオクスンフェルに向かって数マイルのところにある——灰色の石造りの家と建物に囲まれた四角い土地、その周りには泥炭が積まれた緑の一帯がある。それらすべての中心には陰鬱なイチイの木[2] があり、輝くような夏の陽の光と熱気の真っ只中にあっても、死を思わせる重々しい影を作り出している。家から少し離れたところには斜面があり、その先には濃い茶色の池があるが、この池に、石の貯水池から溢れた清水や、既に言及した小川の支流がさらさらと心地よい音をたてながら絶えず流れ込んでいる。家畜は貯水池で水を飲み、人間たちは水差しを持ってきて、面倒だが楽しいやり方で飲料水を得る。水汲み女はオオルリソウ属のシダの葉[3] を一枚取って灰色の石の裂け目にそれを挿す。そうしてできた樋を水が通り、しぶきをあげながら水差しの中へと流れ込む。

スーザンの家は、今日において、彼女が生きていたころの見本とはいえないものの、当時は、透明な窓の一枚一枚は清潔で輝くほどだった。床に落ちた食べ物を拾って食べてもよさそうであったし、客間代わりの台所に入っていくと、白目の皿や、磨かれた樫材の戸棚、もしくは食器棚に人の顔が映るほどであった。他人がこの部屋よりも奥に入ることはほとんどないが、放浪する旅人が、この地の寂しげでしかも絵のような様[4] と、家屋の非の打ちどころのない清潔な様に惹かれてこの台所に入ってきて、これだけ払えば納得してもらえるだろうと彼らなりに判断した額の金を女主人に渡し、泊めて欲しいと頼んだことなら一度か二度はある。そして言うには、ご迷惑をかけたりしません、一日中外をほっつき歩いて写生なんてしてたものだから疲れているんです、奥さんが食べるものを分けてくだされば それで満足、何ならコニストンのウォーター・インで好きなものを買ってきてもいい。しかし、惜しみない金も丁寧な言葉も、スーザンの石のように硬い態度をほぐしたり、必要最低限の言葉できっぱり拒絶する、そんな口調を変えることはない。どんなに説得されても、スーザンは最初に入る部屋のさらに奥に他人を通したりはしないし、憔悴しきった姿を見せても、座って休まれてはどうですか、などと申し出たりしない。大胆でしかも礼儀知らずな人間が勝手にそんなことをすれば、スーザンは招かれざる客が立ち去るまで、何も聞こえない風をして立ちすくむか、ぶっきらぼうに拒絶するかのどちらかである。また、家畜や農作物などを取引している人たちに言わせれば、スーザンは損得について鋭敏、つまり、商売するには手ごわい相手であった。市場でも畑でも、辛い仕事も骨の折れる仕事もいとわず、農産物から最大の利益を引き出すのだ。素早く慣れた手さばきで、干し草作りの戦闘に立つこともある。市場には誰よりも早くやって来て、居並ぶカラス麦を調べ、値踏みをすると、自分の麦が他のどれより良質だと満足し、強欲な表情を浮かべるのである。

スーザンには長い間忠実に仕えている使用人たちがいたが、彼らは作男と言うよりもむしろ仕事仲間といった方がよかった。スーザンは公平かつ適切な態度を取ったので、彼女が風変わりで口数が少なくても、使用人たちはその人となりを理解し、信頼するに足る人物であると見なした。彼らのうちの数人は子供の時分からスーザンのことを知っており、心の奥底で——口にしないし意識することもほとんどなかったが——彼女のことを哀れんでいた。彼らは決して口に出して言わなかったが、彼女の物語を知っていたからだ。

そう、骨と皮ばかりの長身で、険しい顔つきの頑固な女——決して笑わないし、不必要な言葉を吐くこともまずない——が、生き生きとしたバラ色の頬の少女だったころ、イチイ農場の炉辺が家族の愛情と、若い希望と快活さとで、

(2001年12月7日受理)

*宇部工業高等専門学校　一般科　英語教室

彼女同様に光り輝いていたころ。五十年か、五十一年ほど昔、ウィリアム・ディクスンとその妻マーガレットが存命で、娘のスーザンが十八歳、父の名を譲り受けた唯一の弟が彼女よりさらに十歳年下の幼い少年だったころの物語である。

ウィリアムとマーガレットのディクスン夫妻は立派な人々で、私が見たところだが、その人となりは、ウェストモーランドとカンバーランドの地主特有のものであった。つまり、公明正大で独立心が強く、喋りすぎることがなく、心根は優しいがそれを顔には出さない。変化や新しい方法、新参者を好まず、分別者で抜け目ない。家庭生活に満足し、隣人に対して好奇心を抱くことはまずなく、社交の場を持つとすれば、羊の毛刈りやクリスマスといったある一定の折だけである。貯蓄にある種の禁欲的な喜びを見出すが、イングランド北部で守銭奴を呼ぶ言い方によれば、貯蓄ゆえに年老いてから惨めな思いをすることもある。[5] 軽い流行小説などを読むことはなく、行商人によってもたらされる厳格で固い本、例えば、『失楽園』[6] 『復楽園』[7] 『エイベルの死』[8] 『逍遥』[9] 『天路歴程』[10] がだいたいどこの家にもあった。男たちはやれ遊びに行くだの、やれ酒を飲むだの言っては数日間家をあけることがしばしばであった。心配顔の妻たちは、断崖絶壁の道に酔いつぶれた夫が放り出されにされるなどという事態を是が非でも避けたいと、何マイルも何マイルもランタン片手に歩いて夫の後を追い、夜の夜中に夫を見つける。妻に連れ戻された夫はその翌日こそひどい頭痛に苦しむものの、次の日には、麦芽酒やその他アルコール飲料など、この世にはないといった厳しく真面目くさったしかめ面に戻り、恥ずべき行いを妻にとがめだてされることもほとんどない。というのは、妻は当面の心配事が解消されれば、夫が突発的に暴動を起こしてもそれはよくあることと思えるからである。以上が、地主たちが彼らの先駆者で、今や地上から消えつつある社会階級のヨーマンから受け継いだ性質であって、ウィリアム・ディクスンはそういう性格の持ち主だった。抜け目のない賢い農夫で、彼の世代全般に見られることだが、働き盛りのころには、耕作よりも牧羊や牧牛にその抜け目なさを発揮した。この能力を見込んで、遠くはケンダルの先から、または、ボローデイルから、ディクスン自身よりも裕福な地主たちが息子たちを見習いとして彼のもとへ送り込み、羊や牛の飼育法を一、二年学ばせた後で自分の土地を相続させたものだ。娘のスーザンが十七歳のころ、マイケル・ハーストとかいう男がイチイ農場で見習いをしていた。親方であるディクスンと共に働き、その家族と共に暮らし、農場以外の場所ではあらゆる点において対等な者として扱われた。父親はグラスミアの先にあるウィスボーンの裕福な地主だった。マイケルが見習いになったことによって、ハースト家とディクスン家は家族ぐるみの付き合いをするようになり、ディクスン一家がハイベック牧羊地に出向いたり、ハースト家がレッドバンクとローリングターンを通りオクスンフェルを超えて、クリスマスを共に祝うためにイチイ農場に出向いたりした。父親たちは共に農場を散策して、牛や羊の様子を調べたり、目利きらしく互いの馬を評価し合うこともあった。母親たちは互いの搾乳場や家事の仕方を見て、口では相手のやり方を誉めながら、内心ではこっちのやり方の方がいいのに、と思っていた。マイケルとスーザンは農場や酪農のこと以外の何も考えてはいないようだったが、心の中で互いを想い合っているであろうことは、あらゆる点において適当かつ自然なことだったので、父親たちも母親たちもふたりにちらりちらりと目をやりながら、喜ばしく思っていた。もっとも、それについて——夫婦の間であっても——口に出して言うような性格の者はいなかった。

スーザンは独立心が強く頑丈で健康的な少女だった。母親にとっては賢い助手、父親にとっては精神的な同志であって、父親がしばしば言っていたように、病弱な小さな弟に期待できる以上に男性的な面を持っていた。母親はスーザンを可愛がっていたけれども、その愛情はもっぱら弟に注がれていた。マイケルとスーザンが正式に婚約を交わしていない——そもそも率直な愛の言葉が交わされていたかどうかさえ疑わしい——そんな冬のある日、マーガレット・ディクスンは風邪の不養生から肺炎を起こしてしまった。丈夫で家事の手際もよかったが、多忙すぎて病の初期症状に気づかなかったのである。すぐに治るわよ、と台所の手伝いに来た女には言い、ハムやベーコンの型を取って気分が悪くなると、ハーブティーを飲んで少しだけ元気を取り戻した。しかし、死はハムやベーコンを燻し終えるまで待ってはくれない。大きな歩幅で突進し、忌々しき苦しみの矢を放つ。スーザンは病など経験したことがなかったし、恐怖に怯えながらも、母が逝きつつあることを実感する今の今まで、どんなに母を愛しているのかを意識することもなかった。自分が母の願いを何度も軽んじてきたことを思い出しては胸がいっぱいになり、母に対して吐いてきた気の利かない不機嫌な返答が、耳にこだまするのを感じては胸を痛めた。病苦に喘ぎながら横たわる大好きな母に、スーザンが忍耐と愛情による試練に耐えつつ、献身と忍従の機会を今この時に逃してしまうなどということがあろうか！　彼女は善良な少女であり、愛情深い娘であるのたから。

幸いなことに痛みはなくなり、安らぎの時が訪れたが、マーガレット・ディクスンはやはり回復しなかった。その物憂い穏やかさの中で、彼女は死へと向かっていた。ささやくことしかできない彼女は、娘に手招きをして傍らに呼んだ。そして、夫が部屋から出て行くと、訴えかけるような熱意に満ちた目をした娘に、唇の動きと、ゆっくり消え入るような声で語った。

「スーザンや、悲しまないでおくれね。神のご意志なのだし、おまえには果たすべきことがたくさんあるのだから。お父さんの面目をできるだけ保っておくれね、お父さんがウルヴァーストンの方へ向かいなさったら、採掘場跡に行き着く前には追いついとくれ。一杯やると男はわびしい気

分になるんだよ。それから、小さなウィルは……」——ここで哀れな女は表情を崩し、落ち着かないふうにベッドの上掛けに指を這わせた——「……小さなウィルは誰よりも私を恋しがるだろうね。お父さんはよくあの子のことで苛々なさる、あの子は要領が悪いし、頑丈でもないから、ああ、あの子は頑丈でないから、私の小さな息子は。それに、お父さんはあの子をわがままだと思っていなさる、あの子がカラス麦のパンやお粥を食べられないから。戸棚の一番上の古い黒いティーポットには三ポンド以上入っているのだけど……ああ、スーザン、いつもパンを一切れ持っておいておくれね、朝ご飯を食べられなかったときに、ウィルにあげられるようにね。私が、たぶん、あの子を甘やかしてきたのだね、でも、あの子を甘やかしてあげられる人も、もう、いなくなってしまう」

彼女は消え入るような弱々しい声で泣き始めると、娘に見られないように上掛けで顔を覆った。ああ、あの優しい顔！　その目が愛情と聡明さとをたたえていたかけがえのない時よ！　スーザンは母親の耳元に顔を寄せた。

「お母さん、私がウィルの世話をするから。ね、聞こえる？　私があげられるものなら何でもウィルにあげる、一番にあげるのは、お母さんが私たち姉弟にいつも投げかけてくれた優しい言葉よ。安心してよ！　ね、安心して、お母さん」

「約束してくれるのだね、ね、スーザン？　おまえがあの子の面倒をみてくれるなら、私は安心して死ねる。ただね、ウィルには普通じゃないところがある、時々お父さんを試すようなことを言うしね、もちろん、私が逝ってしまえば、お父さんは、私を哀れんで、あの子に優しくしてくれると思うけど。それから、スーザンや、もうひとつ言っておかなければ。今まで言わなかったのだけど、あの子が、告げ口屋なんて言われるといけないから、言わなかったのだけど、でも、ちょうどあの子をなだめたところでね。ウィルは時々マイケルを怒らせることがあってね、マイケルがあの子を殴ったこともあるんだよ。大騒ぎしたくはないけど、でも、あの子は頑丈じゃないし、スーザンや、おまえの言葉なら、マイケルも聞いてくれるだろうから」

青白かったスーザンの顔が赤くなった。自分がマイケルに言うことをきかせることができるなんて第三者から聞かされたのは初めてだったし、重々しく悲壮な瞬間に突然きらめくような喜びを感じたからだ。話し疲れた母親は、苦しそうに意識を失っていった。もはや明瞭な言葉を吐くことはなかったが、夫と子供たちが傍らにやってくると、小さなウィルの手を取ってスーザンに握らせ、懇願するような眼差しを娘に向けた。スーザンは弟の身体に腕を回すと、その小さな巻き毛に自分の頭を傾け、弟の母親代わりになろうと心の中で誓った。

それからスーザンは、弟のためにすべてを捧げた。持ち前の活発さや、そしてまたその個性によって、いつもの行動に目新しさと痛快さをしばしば織り交ぜながら、弟にとって母親よりも精力的で面白い相手になった。小さなウィルに優しい一方で、その他の人、特にマイケルに対しては厳しく痛烈な態度を取った。というのは、母親の庇護を受けられない自分は、自分で自分の威厳を保たなければならない、自分がいかに心惹かれているかを愛する人に悟らせてはいけない、とどこかしらで感じていたからだ。マイケルは彼女のことをきつくて残酷だと言いながら、そういう態度を取らせるままにしていた。彼に背を向けられると、彼女は、この人は自分がどんなに深く愛しているかに気づいていないのね、と独りでこっそり微笑んだ。スーザンはただ端正で見かけがよいという程度だったが、稀に見る美男子のマイケルは、その周囲数マイルのすべての娘たちから憧れの眼差しを向けられるほどの伊達男だったので、女性の眼差しがいかなるものかを心得ていたし、それにしたがって振舞う術も知っていたからだ。マイケルは次男坊だった。ハイベック農場は当然兄が継ぐことになっていたが、ケンダル銀行には彼のための貯蓄がかなりあった。収穫期が終わるとマイケルはラングダル・チャペルでダンスを習い、夜になると台所の石材の床でご機嫌な調子でステップを踏んだ。ダンスを習ったことのないスーザンは密かにそれを賞賛していたのに、賞賛している最中でさえも、同じ屋根の下に住んでいる限り彼を遠ざけておこうと自ら決めた規則にしたがって、表向きは絶えず彼を蔑んだ。ある夕べ、彼女の痛烈な言葉に気分を害された彼は、立てた膝に腕を回して炉隅に座り、頭を垂れ、薪が燃えるのをぼんやりと見つめながら、きつい労働の日を過ごした後の休息に耽溺してもいた。スーザンは窓辺の低い長椅子のゼラニウムの間に腰掛け、消えゆく秋の日差しをとらえてウィリーのシャツの襟元を縫い上げようとしており、ウィリーはマイケルがいる炉隅の反対側で、敷石の上でぐったりと横になって、ハシバミの長い棒で火のついた薪を時々突ついては輝く火の粉を舞い上がらせていた。

「三人組の踊りがお出来になるらしいけど、どんないいことがあるの？」と、スーザンは鋭い眼差しを向けながらマイケルに尋ねた。彼は踊り上手を自慢に思っていたのだ。「耕したり、刈り取ったり、烏の巣を取りに岩に登るときの役にでも立つの？　私が男なら、そんな女々しいことをするなんて恥ずかしいと思うでしょうよ」

「あなたが男なら喜んでするでしょうね、きれいな女性に囲まれてちやほやされることなら何でも」

「あの娘たちがあなたにしていることね！　マイケル、私が男ならそんなこと！」

「そんなことがどうだ、とおっしゃるんですか？」と言って彼は一息つき、スーザンが言葉を続けるかもしれないと虚しい期待を抱いた。返答なし。

「スージー、あなたが男だったとしても、あなたと僕は違う、あなたはきついし、強情すぎる」

「私がきつくて強情？」と、スーザンはできるだけ無頓着に、しかしちょっと刺のある調子で尋ねた。マイケルは敏感な耳で口調の変化を感知した。

「勘違いしないで、スージー！　君は時々片意地だけど、

それはそれで結構。僕は元気のない女の子は好きじゃない。かなりきれいな女の子がダンス教室に来るけど、あの娘は本当にくだらないんだ。あなたが不機嫌なときに見せてくれる瞳の輝きを、あの子の瞳は浮かべない。そう、あなたの瞳なら台所の奥からだって見えますよ、暗闇の猫の瞳のようにね。ええ、あなたが男だったらね、私がそうであるようにあなたの瞳に不思議な感覚を抱くはずだ。つまり、私はあなたの瞳が気に入っていて、というのは……」

「というのは何だって言うの？」と言いながらスーザンは顔を上げ、マイケルがすぐ傍に来ているのに気づいた。

「というのは、こうやって僕はうまく収めることができるんですよ」と答えると、彼は突然スーザンに口づけた。

「うまく収める、ですって？」――スーザンは彼の胸の鼓動が聞こえるその腕の中から、半ば怒りに震えながら身をよじり出した――「覚えておいて、収めるっていうのはそんなに簡単なことじゃないのよ」　そして彼の耳元を平手で鋭く打った。彼は気分を乱し、落胆してもとの場所に戻った。スーザンは、顔から赤みが、目から戸惑いが消えても彼に顔向けできないと思ったが、その場から立ち去ることはせずに再び身をかがめ、縫いものを続けている振りをした。

マイケルは「エリナー・ヘブスウェイトはくらだない女かもしれない。しかし……」とつぶやいたかと思うと、「忌々しい餓鬼め！　何てことをするんだ！」と声を荒げた。折悪しくウィルが炉を一突きし、燃え盛る大きな薪をマイケルの顔の方へ飛ばしてしまったのだ。マイケルは「このうすのろの気が利かない餓鬼め！　思い知れ！」と叫ぶと、ウィルを一、二度蹴って半べそをかかせ、台所の奥へと追いやった。そして、やや落ち着きを取り戻すと、スーザンが自分の前に立ちはだかっているのに気づいた。彼女の顔は、燃え盛る炎に下から照らされ、普段とは違う部分が影で覆われていたために奇妙で恐ろしいほどだった。

「覚えておいて、マイケル」と彼女は言った。「この子に母親はいないけど、誰からも守られていないわけではないのよ」

「父親が皮の鞭で打っているのだから、僕がそうしちゃいけないって法はない、顔にあんなものをぶつけられたんですよ」と言うと、マイケルは痛みに耐えかねるかのように頬に手を当てた。

「父親は父親よ、父親だから打つ、それ以上の理由はないわ。あの子があなたに薪をぶつけたのは事故であって、わざとしたのではないわ。それなのに、あなたはあの子を蹴った。肋骨が折れていないのは神のご加護だわ」

「大声を出せるだけの元気も確かにあるようですね。他の奴なら二倍の力で蹴られても『畜生め』程度のことしか言わない。しかしね、あなたのウィルちゃんは触られただけでも、小生意気な豚みたいに泣き声をあげないと気が済まないようだ」と、マイケルはむっつりして言った。

スーザンは窓辺の椅子に戻り、窓の向こうに流れる雲を一、二分ぼんやりと見つめていると、目に涙が溢れてきた。そして、立ち上がり、裏庭へと続く扉の方へ向かい、扉に手をかけようとすると、低い声が「スーザン、スーザン！」と自分を呼んでいるのに気づいた。その響きにスーザンの身体が震えるのを感じた。

彼女の心はマイケルへの想いでいっぱいだったが、愛する人が弟に流させた涙が拭われぬうちに愛に身を任せてしまうのは、哀れな弟への裏切りであり、亡き母への不孝であるように感じられた。だから、スーザンは気にも留めない振りをして、暗闇の中へ入り、すすり泣きが聞こえる方へと進み、使われていない樽と攪乳器の間で丸くなって座り込んでいるウィリーの前にやって来た。

「私といっしょにいらっしゃい」と声をかけて、姉弟は果樹園へ行った。果樹は葉を落とし、ところどころ灰色の苔に覆われて不気味であった。そして、ヒューヒューと音を立てる十一月の風が、伐採された木々を撫でるように吹き、大枝をバチバチと鳴らしていた。その下の暗闇で弟は姉の膝の上に座り、その肩に頭を持たせかけた。

「火遊びしちゃ駄目でしょ。悪い遊びよ。そんなことしているともっときつい罰を受けることになるわよ。私がマイケルなら二倍の力であんたを蹴ったでしょうよ。あの人はあんたに怪我をさせたわけではないでしょう」と、半ば問い掛けるようにスーザンは言った。

「うん、でも、あいつは蹴ったんだ。僕、気持ちが悪くなっちゃったよ」と言ってウィルは物憂げに頭を姉の胸元へ寄せた。

「ほらほら！」とスーザンはかりたてるように言った。「男らしくしなくちゃ。見ていたけどそんなにひどくはなかったわ。ほら、赤い牛が最初に来たとき、あの牛ったらあれよりもずっと強く私を蹴ったのよ、脚を縛らずに乳を搾ろうとしたものだから。ねえったら！　ペパーミントの飴があるわ、それから、今夜、鶏肉のパイを作ってあげるから。お願いだから、すねないの。マイケルがあんたに痛い思いをさせたかと思うと、私は心の底から辛いのよ」

ウィリーは顔を上げ、蒸気した頬から濡れた巻き毛を払いのけた。そして、ふたりは立ち上がると手に手を取って家路についたが、ゆっくり静かに歩きながら、ウィリーは我慢できずにすすり泣いた。スーザンは弟を井戸端へ連れて行って、ついさっきの争いの後が完全に消えるまで、その顔を洗ってやり、巻き毛を整えてやった。優しくキスをして台所に入りながら、スーザンは、マイケルがいて、ふたりを仲直りさせられればいいのだけど、と思ったが、激しく燃えていた炎が消えて中は暗く、薪は灰の山となっていた。彼女は心が沈んでいくのを感じながら、手探りの暗闇の中だが、マイケルがいないことを知った。そして、暖炉に燃えさしを一本投げ込み蝋燭を灯すと、腰を下ろして黙って仕事に取り掛かった。ウィリーは火の傍に置いた腰掛けの上で身を縮め、ちらりちらりと姉の方を見たが、その重苦しく深刻とも言える表情にわけが分からないまま申し訳なさと息苦しさとを感じた。誰も来ない。ふたりの姉弟以外、家の中には誰もいなかった。スーザンが家を切り

盛りするのを手伝う老婆は、誰か知り合いの家に出掛けていてその夜はいなかった。父親のウィリアム・ディクスンは荒野で羊を追っていた。スーザンは夕食の準備をする気になれないでいた。

「スージー、僕のこと、怒っているの？」と、ウィリーは甲高いが優しい声で尋ねた。彼はいつしか姉の傍らにやって来ていた。「僕、もうぜったいに火遊びはしないから。それに、マイケルが蹴っても泣かないから。お願いだから、死んだお母さんのような顔はやめて……お願い、ねぇ、お願い、お願いだからやめてよ！」と声をあげると、彼は姉の肩に顔を埋めた。

「怒ってないわよ、ウィリー」とスーザンは言った。「私のこと、怖がらないでね。お腹がすいているんでしょ、ご飯の準備をしてあげるわ。それから、マイケルのことも怖がらないで。マイケルはあんたの髪の一本一本に触れるときだって何か理由があるのよ……ええ、そうなのよ」

ウィリアム・ディクスンが帰宅したとき、スーザンとウィリーは手を取り合って一緒に座り、かなり元気な様子だった。ウィリアムはふたりに寝るように言い、ひとり起きてマイケルの帰宅を待った。翌朝、スーザンが寝室から下りてくる一時間前には、マイケルは石炭を取りに荷馬車で出発していた。労働の日は長い。マイケルの帰りは前の晩よりもたぶん遅いだろう——いずれにせよ、自分が寝る時間よりも遅くなるであろうことを、スーザンはよく知っていた——その時間に寝室にいることはあっても、台所にいることはどう考えてもない。寝室でスーザンは真夜中過ぎまで横にならずに外を見ていた。そしてマイケルが荷馬車で坂を上がってきたとき、薄暗い月明かりの中だったが、彼が酒を飲んだ男のまさにその姿をしているのを見て取った。彼がいかにして自分を忘れようとしたかを思い知らされて、嫌な気持ちになったが、多くの少女たちが抱くであろうほどの嫌悪感や衝撃を抱いたわけではなかった。時に泥酔する男に、罪悪ではなく活力を見出していた社会階級にあって、当時でも、スーザンのように育てられなかった少女たちが一方にはいたのである。とはいえスーザンは、翌日マイケルが、やむを得ず、きつい仕事に取りかかるのを断念し、気分の悪そうな暗い表情で離れ家や農場のあたりをうろついているのに対して、高慢な態度を決め込んだ。ウィリーの方がマイケルに同情し、早くも日暮れ前には、あからさまにマイケルの味方をしていた。ウィリーは馬たちに水を飲ませ、マイケルが薪を割るのを手伝った。スーザンは暗い気持ちで腰を下ろし仕事をしながら、乳搾りが行われている家畜小屋から聞こえる、はっきりとはしないものの陽気な会話に耳を傾けていた。自分が最中にいる戦を起こした張本人でありながら、敵のもとへ走ってしまうなんて、と小さな弟が裏切り者であるかのように思えて苛立ちさえした。自分には話しかける相手もなく独りなのに、弟とマイケルは、私が喜んでいようと悲しんでいようとお構いなしにお喋りを続けている。

するとウィリーが飛び込んできた。「スーザン、スーザン、一緒に来て！　見せたいものがあってね、すごく可愛いんだ。納屋の角を曲がって……急いで！　急いで！」　スーザンは半ばしぶしぶだが、辛い日に何らかの変化が訪れるであろう期待感を半ば感じながら、弟に引っ張られた。そして納屋の角を曲がると、マイケルに腕をつかまれた。そこで彼女を待っていたのだ。

「ウィリーったら！」と彼女は叫んだ。「意地悪な子ね。可愛いものなんてないじゃない……どうして私をここに連れてきたのよ？　もう行かせて。忙しいのよ」

「一言だけ言わせてください。いや、行ってしまいたいのだったら行ってください」と言うと、マイケルは、スーザンが振り払おうとしていた手を急に緩めた。やっと彼女は自由になったが、一、二歩後ずさりしただけで、ウィリーについてぶつぶつ言い出した。

「あなたは行ってしまうのですか？」とマイケルは、悲しげに言った。「僕の心からの一言に、あなたは耳を傾けようともしない」

「私の聞きたいことなのかどうか分からないじゃない」と、さらに後ずさりをしながら、彼女は言い返した。

「聞きたいかどうかは、あなたが決めてください。僕はあなたに聞いて欲しいし、気に入るかどうか言って欲しい」

「分かったわ、話して」とスーザンは彼に背を向けながら言い、エプロンの縁を手でたどった。

マイケルは彼女の耳元に近寄った。

「あの夜は、ウィリーを傷つけて申し訳ありませんでした。ウィリーは許してくれたけど、あなたは？」

「あなたはウィリーをひどく傷つけたわ。でも、申し訳なく思ってくださるのなら、私はあなたを許すわ」

「ちょっと待って！」と、マイケルは彼女の腕を取りながら言った。「言わなければならないことは他にもあるんです。私はあなたに私の……その何と言えばいいでしょうか、スーザン？」

「私には分からないわ」と彼女は半分笑いながら、しかし必死で離れようとしながら言った。彼女の力は強かったが、離れることはできなかった。

「分かっているはずだ。私の……私があなたになって欲しいのは、ええと？」

「あの、私には分からないの。だから、あなたは黙って私を行かせてくださればいいのよ。じゃなかったら、昨夜みたいにあなたはひどい状態なんだって、思うしかないわね」

「昨夜の僕がどんな状態だったか、どうしてご存知なんです？　僕が戻ったのは夜中の十二時過ぎなのに……ご覧になっていたんですね？　あぁ、スーザン、僕の妻になってください。酔いどれ亭主を見張らせたりさせませんから。あなたの夫になれるのなら、あなたの可愛らしい顔を見にまっすぐ早く家に帰りますよ。これで、僕があなたに何になって欲しいのか、お分かりだ。僕の妻になってください。なってくれますよね、僕の可愛いスーザン？」

彼女はしばらく声を出すことができなかった。それから

「お父さんに聞いて」とだけ言った。そしてやっと、彼から身を離すとタゲリのようによろよろしながら納屋の角を曲がっていき、自分の小さな部屋に戻ると心の底から泣いた。棒立ちになっていたマイケルが勝利の笑みを浮かべたのは、それからだった。

「お父さんに聞いて」は、踏むべき一段階であった。ダニエル・ハーストとウィリアム・ディクスンは各々が子供たちに譲り渡す財産について、時間をかけて話し合った。縁談をまとめるとき、親たちはそうするのだ。各々の父親が子供に相続させる財産のだいたいの量を決めると、彼らの呼び方にならうなら「若い衆」は時間をかけて、親たちが経験から判断して決めた目標まで到達し、そして所帯を持つことになるが、ふたりはまだ若いのだから急ぐ必要はない。ダニエルに言わせれば、マイケルは行動的だが、農場経営全般を委ねるには思慮が足りない。しかし、彼は父親として息子を見守り、貸しに出されている農場を、気をつけて見ておくことになった。

マイケルは父親たちが事前に同意していることに目ざとく気づいており、そうでなければひるんでいたかもしれないが、スーザンの夫になることについてそれほど緊張感を抱いていなかった。用意は万端だし、障害もない。そして、数々の助言に当然耳を傾けるべきだと、彼は考え、その一つ一つに頷いていたけれども、包み隠さず言うならば、それほど真剣に聞いていたわけではなかった。そしてスーザンが階下に呼ばれ、家族用の部屋がふたつある階から、居間のある階へと、ゆっくりと階段を下りながら一同の前に姿を現した。彼女は落ち着いた静かな表情をしようとしたが、それは無理だった。愛するマイケルの隣に座り、頭を垂れ、頬を赤らめ、顔を上げることも動くこともできずにいると、父親がどこか畏まって婚約に同意し、多くの世間的な教訓を垂れた。スーザンは胸を高鳴らせながら必死に耳を傾けたが、父親が厳かにまた悲しげに亡き妻について言及すると、抑えきれずにすすり泣き、エプロンを顔に当てて鏡台の脇の長椅子に移動すると、堰を切ったように泣き出した。優しい抱擁と、耳元で何度もつぶやかれる愛の誓いに慰められて、何と奇妙に甘美な気持ちになったことか！　父親は火の傍に腰を下ろし、過ぎ去った日々に想いを巡らした。ウィリーはまだ外にいたが、スーザンとマイケルは誰がそこにいて誰がいないかなど、気にも留めずに、自分たちが婚約したことだけを意識していた。

一、二週間の後、ふたりは婚約が認められたことを正式に告げられた。偶然にも、近所の小さな農場が借り手のないままになっていたので、マイケルの父親が息子のためにそれを借り入れ、最初の一年間の地代を負担しようと申し出た。一方のウィリアム・ディクスンはある程度の食料を提供しようと言い、ふたりの父親は一緒に新居の準備を手助けすることになった。以上の取り決めに、スーザンは静かにまた気にも留めぬふうに同意したが、幸福な時間を加速させてしまうような、こういった準備に彼女はあまり頓着していなかったし、持参金の額や財産などについて全く気にかけていなかったのだ。彼女の心を騒がせていたのは、マイケルが時々こっそりともらす不平であって、例えば、義理の父親になる人が娘の取り分としている牛や豚は、必ずしも農場一の家畜ではないと、彼は不満を言っていた。もっとも、マイケルは実の父が出し惜しみしていることにも不満を垂れていたので、恋愛という純粋な夢から叩き起こされ、世俗的な富に目を向けさせられることに対してスーザンが感じていた嫌悪感は、ある程度は緩和されていた。

スーザンが多忙な時を過ごしている一方で、ウィリーは塞ぎ込んでいた。肉体をもろく弱々しくしているのと同じ過敏さが、その精神にも一筋通っていたのである。のけ者にされたウィリーは、一見したところ、離れ家で不恰好な樽の蓋を削ったり、彫刻したりするのに没頭しているようだった。しかし、彼は意識してマイケルを避け、スーザンとさえも顔を合わせないようにしていた。スーザンは忙しすぎて最初このことに気づかなかったが、マイケルが笑いながら次のように指摘したのだ。

「ウィリーをご覧よ！　まるで捨てられた恋人が、嫉妬しているみたいだ、見捨てられたっていう暗い顔で僕を見るんだよ」　マイケルが大声でおどけてそう言ったので、ウィリーはわぁっと泣き出すと外へ出て行った。

「離して、離してったら！」とスーザンは言った。（このとき彼女は恋人に抱きしめられていた。）「私、行かなくちゃ、あの子がすねているみたいだから。そうするってお母さんに約束したんだもの！」　彼女は自分を恋人から引き離すと、弟を探しに出た。牛舎や納屋を覗き、冬で葉が落ちているので隠れるところも見当たらないが、果樹園を通り抜け、夏の終わりになるといつも羊毛を貯蔵する小屋へと入っていき、そして、薪の山の後ろまで来たときに、追い詰められた獲物のように中に座り込んでいるウィリーを見つけた。

「ウィリー、何しているのよ、あちこち、探したんだからね」と、息を切らしてスーザンは言った。

「お姉ちゃんが僕を探すだろうなんて思わなかったもん。何度遠くへ行っても、誰も探しに来ようなんてしなかったもん」と、ウィリーは新たに泣き出しながら訴えた。

「馬鹿々々しい」とスーザンは答えた。「馬鹿なこと言わないのよ、困った子ね」　しかし、大きな茶色い薪の下に弟が作った穴の中にスーザンももぐり込み、その隣に座り込んだ。「いつだって逃げられるのだから、誰もあんたを追いかけたりしないわよ」と彼女は言った。

「僕にいて欲しくないんだ。だれも僕なんて要らないんだ。お父さんと出掛けたときも、お父さんたら、僕は手伝うより邪魔する方が多いって言うんだ。お姉ちゃんは、前は僕といっしょにいるのが好きだったみたいだけど。でも、マイケルに取られちゃったもん。それに、お姉ちゃんだって僕がいない方がいいんだ。それでも、僕は我慢しなくちゃと思うのだけど、マイケルが僕をじっと見るのが嫌なんだ。マイケルは、お姉ちゃんを独り占めにして喜んでいるんだ」

「でも、私はあんたが大好きよ、すごく好きなのよ、ウィリー！」と言って、スーザンは弟の首に腕を回した。

ウィリーはちょっと黙り込んでから、「マイケルと僕とどっちが好き？」と物足りなそうに尋ねた。姉の腕から離れ、姉の顔を覗き込み本当のことを言っているかどうかを確かめながら。

スーザンは顔を真っ赤にした。

「そんなこと聞かないでよ。あんたがそんなことを聞くなんてよくないし、私が答えるのもよくないわ」

「でも、お母さんはお姉ちゃんに僕を大事にするよう言ったじゃない！」とウィリーは哀れっぽく言った。

「ええ、だから私はそうしているわ。そして、これからだってそうだわ。恋人だって、夫だってあんたとわたしの間には入り込めないの……ええ、誰だって入り込めないわ。お母さんに約束したようにあんたにも約束する、神様のみ前で、お母さんがこの世の言葉を聞くことができるんだったら、お母さんに聞こえるようにね。ただね、私はあんたがすねるのには耐えられないわ」

「お姉ちゃんはずっと僕を好きでいてくれるんだね？」

「ずっと、ずっとよ。もっと……マイケルを好きなのよりもたくさん」とスーザンは声を落としながら言った。

「分かったよ」とウィリーは、彼の姉には分からないであろう荒々しい、棘のある言葉をたくさん頭に浮かべながら言った。スーザンは立ち上がろうとしたが、ウィリーはしっかりと姉を捕まえた。こんりんざいお姉ちゃんは自分のものだけど、こんな時がまた来るかどうかは分からないのだから。そうやってふたりは身を寄せ合い黙って座っていたが、笛が畑の入り口のところで鳴って、農場で働く者たちに夕刻を知らせ、食事の用意ができたことを知らせると、ふたりは家へと戻っていった。

第二章

スーザンとマイケルは四月に結婚することになっていた。マイケルが既に所有権を得ていた新しい農場は、イチイ農場から三、四マイル離れていたが、人がまばらにしか住んでいない地域では、ごく近くと言える——そんな折に、ウィリアム・ディクスンが病に倒れる。ある夜、彼は頭と足の痛みを訴えながら帰宅し、スーザンが作ったミルク酒——かかりかけの風邪を治すのに、田舎の家庭では糖蜜入りのミルク酒が飲まれていた——を飲む気にもなれなかった。並々ならぬ疲労を感じてウィリアムは寝床へ入ったが、若いころのこと、まさにその家に両親と住んでいたころのことを、いつになく思い出していた。

翌朝になるとウィリアムはそれまでの記憶を失っており、自分自身の子供の顔も分からず、乳離れしたばかりの幼児が母親を呼び、ひどい痛みを和らげてもらおうとしているかのように泣いていた。コニストンの医者はチフスだとスーザンに告げ、感染に用心するよう警告し、患者の様態については首を振った。スーザンの近くに悩みを分かち合う友人はいなかったが、誠実さそのものの優しい老ペギーと、家族に病を感染させてしまう危険さえなければ喜んで力になってくれるであろう、使用人の妻たちが数人いてくれた。もっとも、スーザンは怖いと思わなかったし、落胆することもなかった。実際のところ、心身のあらゆる活力を必要としていたので、スーザンには恐怖感を覚える余裕さえなかった。それに、若い者は感染の危険をほとんど経験していないので、怖がることもないのである。スーザンは、マイケルが家にいて、ハイベック農場の父親の家にウィリーを連れて行ってくれたらいいのにと、時折心から願ったが、そのときのウィリーは大人しく、力になってくれさえしたし、多くの点で無垢であったためにかえって他人からひどい扱いを受けることがあるので、マイケルがアプルビーの市に行っていようと、もっと遠くの、例えば馬を追ってヨークシャーに行っていようと、それはそれでたぶんよかったのだ。

父親の容態はますます悪く、医者はコニストンの看護婦を呼ぶよう強く勧めた。本職の看護婦ではない——コニストンに本職の看護婦を雇うほどの財力はないので、医者に呼ばれれば賃金欲しさにどこへでも行く寡婦のことである。その看護婦がやって来ると、スーザンは急に倒れてしまった。彼女は感染しており、その後何週間も意識を取り戻せないまま横たわった。意識を取り戻したのは、とある初春の朝——結婚式が行われる四月の早朝だった。暖炉にはほとんど火がなかったが、朦朧とした意識の中であたりを見回すのに残り火で十分だった。ベッドの窓側の、カーテンの向こうに誰かが腰掛けているような気がしたが、それが誰なのかを知りたいとも思わなかった。気だるさのあまり、考えるのも大儀だった。目を閉じて、再び贅沢な眠りをむさぼった。次にスーザンが目覚めると、コニストンの看護婦がそれに気づき、お茶を入れた。スーザンは美味しくそれをいただいたが、看護婦と話をすることもなく、身動きもせずに横たわった——眠りはせず、小さな寝室に聞こえる生活感溢れる音に、奇妙だが心地よい思いを抱きつつ耳を傾けた——炉辺で灰が落ちる音、半分お湯の入ったヤカンの気まぐれだが歌うような音、乳搾りを終えた牛たちが再び牧場へ向かう音、階段をぎしぎし鳴らしながら上がってくる年寄りの足音——ペギーの足音であることをスーザンは知っていた。足音はドアのところまで来て、止まり、足音の主は聞き耳を立てて中の様子をうかがい、木の掛け金を動かし、寝室を覗きこんだ。枕もとにいた看護婦は立ちあがり、ペギーの方へ行った。その顔を見ることができればスーザンは嬉しかったであろうが、身体が弱りきっていたために振りかえることもできず、横たわったまま耳を傾けた。

「お嬢さんはどんな具合かね？」と年寄りの震える声はささやいた。

「ずっといいわ」ともうひとりが答えた。「今まで起きていらしてね、お茶を一杯飲まれたわ。今によくなるわよ」

「旦那さんのことを何か尋ねなさったかね？」

「しっ！　いいえ、一言も喋っていらっしゃらないわ」

「ああ、気の毒な、気の毒なお嬢さん！」

ドアが閉まった。スーザンは何となく悲しくなり、自分が哀れに思えてきた。何があったのだろう？　私の愛する人たちに何があったのだろう？　そして、少しずつ少しずつ夜明けが近づき、以前の生活を照らしていた太陽がゆっくりと上がり、部屋の隅々がはっきりしてきた。彼女は何らかの悲しみが訪れつつあるのを感じ、それが何なのか分からないし、尋ねるだけの気力を回復してもいないのに、泣き出してしまった。夜の闇が消え去らぬうちに――彼女は再び眠ることはなかった――スーザンは小さな声で看護婦を呼び、尋ねた……。

「誰のこと？」

「誰のことって、何のことでしょう？」と女はぎょっとして、また、無駄なことだがスーザンの心をかき乱したくないと、そ知らぬ振りをして答えた。「じっとしていらっしゃいな、お嬢さん。そしてお眠りなさい。お薬よりも何よりも眠るのが一番ですよ」

「誰？　何か悪いことがあったのでしょう。誰なの？」とスーザンは繰り返した。

「お嬢さん！　悪いことなんてありやしません。ウィリーさんも峠は越えましたし、ずいぶんいいですよ」と女は言った。

「お父さんなの？」

「ああ！　ご主人様はもう大丈夫ですよ」と、女は何かを探しているかのように、目を別の方向に走らせながら答えた。

「だったらマイケルなのね！　ああ、ああ！」スーザンが弱々しく哀れで、ひどく興奮した声を続けざまにあげると、看護婦はそれをなだめながら、マイケルさんは三時間前にここにお見舞いにいらっしゃいましたけど、十分に健康でお元気そうでしたよ、と言った。

「だったら、あれからあの人に何かあったなんてことをないのね？」とスーザンは尋ねた。

「ご安心なく。何もありません、ええ、全くね！　あの方が革靴を履いて元気なご様子でお庭から出て行きなさってから、どうこうなさったなんて聞いてないですよ」

看護婦が後にペギーに語ったことだが、ウィリアム・ディクスンについての曖昧な返答を聞いて、スーザンが簡単に心を落ち着かせたのはよかった。マイケルについてしたように父親についてもあれこれ問い続けていたら、父は亡くなり一ヶ月以上も前に葬られたことを知ることになった。もう一つよかったのは、意識を取り戻した日から長い間、病み上がりの弱々しい状況が続き、知覚が鋭敏さを欠いていたために、弟に訪れた悲しい変化に気づかなかったことである。ウィリーは体力を取り戻し、食欲も旺盛だったが、目は絶えず宙を泳ぎ、集中力はなく、言葉は遅く一貫性がなく支離滅裂だった。人が言うには、ウィリー・ディクスンが僅かながら保持していた機知は熱病によって失われ、ウェストモーランドで白痴を意味する「本能的」な状態に、かわいそうだが陥っていた。[11]

姉に対する愛情と従順さは、病気する以前にウィリーが持っていた他のどんな感情よりも長く続いていたので、他人が長い間予測していたことに、スーザンは気づいていないようだった。それでも気づいてしまったのは、弟の中で野蛮なものが目覚めつつあるのを感じたときである。次のような具合だった――

とある六月の夕べ、スーザンはイチイの木の下に座り、編み物をしていた。[12] 病み上がりの青白い顔と衰弱していたことが、喪服を着ているのと相まって、彼女はいつになく人目を引いた。彼女はもはや、何ごとにも朗らかで自信ありげなスーザンではなかった。作男たちは乳を絞るために牛を中に入れ、マイケルはどこか主人面をして中庭で指示をあたえようとしていた。「主人面をして」というのは、農場の所有権はウィリーにあり、スーザンがウィリーの後見人だったからだ。彼女の健康が回復したらふたりは結婚することになっていたので、マイケルの権威ぶった態度は正当化されるべきものだが、使用人たちは口にはほとんどしなかったものの、マイケルに嫌気がさしていた。彼らは、自分たちから見ればマイケルが農業についてほんの青二才で、何もわかっていなかったころに、自分たちの卓越した知識で彼の無知を進んでかばってやったのを覚えていた。彼らはスーザンの指図だったらもっと喜んでしたがっていたであろう。いや！　ウィリーから指図されたとしても、地主に対して代々抱いてきた思いから、マイケルに対するよりもずっと誠意を持ってその指図にしたがったであろう。もっとも、たった三周編んだだけで疲れてしまうスーザンは、自分の周囲で何が起きているのかについて気づいていないようだったし、気にかけてもいないようだった。そして、ウィリーはと言えば、ドアの敷居のところでふらふらしながら――ああ、哀れなウィリー！――身体は確かに成長しているが、落ち着かない目と閉まりのない口をして、奇妙な唸り声をあげたかと思えば、自分が出した声に虚ろな笑みを浮かべている。ふたりの年老いた作男は彼の前を通りながら、不気味そうな顔をして互いを見合い、首を横にふった。

「ウィリー、いい子だから」スーザンは言った。「そんな声を出すのはやめて……頭が痛くなるわ」

彼女の声は弱々しかったので、ウィリーには聞こえていないようだった。いずれにしろ、彼は時折唸り続けた。

「おい、静かにしろ」とマイケルが通りしなに拳骨を振り上げながら乱暴に言った。スーザンはふたりに背を向けていた。虚ろだったウィリーの顔は恐怖に満ちたものへと変わり、よろよろしながらスーザンのところへ行き、その腕を自分の身体に回させると、避難所に入って安心したかのように、マイケルにしかめ面をして見せた。スーザンはふたりの間で何が起きているのかを知り、また、そのとき初めて弟の奇妙さに衝撃を受け、説明を求めるような表情でマイケルの顔を見た。マイケルはウィリーの挑戦的な態

度に苛立っていたので、控えめな言い方をあえてしなかった。

「こいつが馬鹿なのは熱にかかったせいだけじゃない……人並みの知恵も持ってなかったし、治る見込みもないんだ」

スーザンは何も言わなかったが、顔をますます青白くし唇を震わせた。もの言いたげに弟の顔をしばらく見ていたが、その間ウィリーは、牛小屋の大きな池に浮かぶアヒルの動きに見入っていた。彼は時々小さな声で独り笑っていた。

「ウィリーはアヒルが飛ぶのを見たいのね」と、スーザンは無意識に、幼い子供に対するような言い方をした。

「ウィリー、ブー！　ウィリー、ブー！」とウィリーは手を叩きながら応えたが、姉の目を見てはいなかった。

「ちゃんと話すのよ、ウィリー」と、スーザンは必死に心の平静を保ち、弟の注意を自分から逸らせないようにして言った。

「私が誰だか分かるでしょ……私の名を呼んでちょうだい！」と言いながら、スーザンは痛いほど強く弟の腕を握り、自分の方に目を向けさせようとした。そしてウィリーは姉の方に目を向け、ほんの一瞬だけ、知覚の光をその顔に現した。しかし、姉の名前を思い出すのは辛い骨折りであって、しかも思い出すことができないので、ウィリーは泣き出してしまった。そして、かつての愛らしさと茶目っ気を見せながら姉の肩に顔を埋めたが、スーザンは弟を優しく引き離すと、自分の小さな寝室へと向かった。ドアに錠を下ろし、マイケルが呼ぶのに全く応じず、ペギーが外に出て家庭的な優しさに身をまかせるように、うながすのにもほとんど応じなかった。開け放たれた窓からは「ウィリー、ブー！　ウィリー、ブー！」という白痴の声が聞こえていた。

注

※　「半生をかえりみて」（1）は、Elizabeth Gaskell (1810-65) の中篇小説 "Half a Life-time Ago" の第一章と第二章の日本語訳である。この小説はまず "Martha Preston" として *Sartain's Union Magazine* (1850, Vol.12) に掲載、その後大幅に改訂され、タイトルも現題に改められて *Household Words* (1855, Vol.12) に掲載された。そして、さらなる改訂を経て、既に出版していた他の数編の中篇、短篇小説と共に *Round the Sofa* (2 Vols., 1859) に掲載された。今回依拠したテクスト *Cousin Phillis and Other Tales* (Oxford: Oxford UP, 1981) 59-102 は、1859 年版によるものである。なお、"Half a Life-time Ago" について以下で言及する場合のページ数は、すべてこのテクストによる。

舞台であるウェストモーランドの丘陵地帯そのものについては注の 1 で述べるが、Edgar Wright は、*Mrs. Gaskell: The Basis for Reassessment* (London: Oxford UP, 1965) 124-25 で、ギャスケルがこの地域にアマチュアの社会学者的な関心を向けていることを、この小説の冒頭部を挙げながら指摘している。ライトはまた、社会的な背景が個人にあたえる影響に、ギャスケルが強い関心を寄せていることにも言及し、この小説を書いたとき、ギャスケルが *The Life of Charlotte Brontë* (1857) を執筆する準備段階にあったとも述べている。なお、"Mary Preston" はアメリカの読者を意識して描かれており、そのことも "Half a Life-time Ago" に、湖水地方の地誌的要素が濃い原因と言えるだろう。

John Lucas が、*The Literature of Change: Studies in the Nineteenth-century Provincial Novel.* (Suss.: Harvester, 1977) 1-33 で指摘しているように、ギャスケルは時代の変化に敏感で、多くの小説にそれを反映させた。例えば *Cousin Phillis* (1863-4) では、北イングランドの田園のあり方が、鉄道の敷設によって変化しようとするまさにその瞬間をとらえているが、「半生をかえりみて」は、原題であり、第一章の冒頭の言葉でもある "half a lifetime ago" や、ウェストモーランドの典型的な地主であるウィリアム・ディクスンの性質について述べた「今やこの地上から消えつつある社会階級で、彼らの先駆者であるヨーマンから受け継いだ性質」(61) という言葉などから、変化の瞬間をとらえるというよりも、むしろ、変わりゆく地域社会への郷愁を込めて、書かれていると考えられる。同様の時代設定を、ギャスケルは他の作品でもしばしば用いており、このことについて、John Geoffrey Sharps は "Many of her stories seem to be set in a time which, though passed, can still be remembered, some vague period not yet part of history." (*Mrs. Gaskell's Observation and Invention: A Study of Her Non-Biographic Works.* [Fontwell, Suss.: Linden, 1970] 247) と指摘している。

1　ウェストモーランドはイングランド北西部の州で、山や渓谷が多く、その西部が湖水地方である。中心都市はケンダルで、古くから羊毛業が盛んである。なお、ギャスケルにとって湖水地方は、家族で休暇を過ごす地であり、Charlotte Brontë (1816-55) と出会った思い出の地でもあった。(Angus Easson, introduction, *Cousin Phillis and Other Tales* [Oxford: Oxford UP, 1981] x を参照。)

ギャスケルはまた湖水地方の桂冠詩人 William Wordsworth (1770-1850) に強い敬愛の念を抱いていた。ワーズワスが、Betty Foy という女性の白痴の弟への愛情を詠んだ "The Idiot Boy" (*Lyrical Ballads*, 1798) が、「半生をかえりみて」の背景にあると、Easson は *Elizabeth Gaskell* [London: Routledge, 1979] 211-12 で指摘し、ふたつの作品を比較している。

2　イチイは墓場によく植えられる植物で、一般に死を表すが、場合によっては死と不死の両方を表す。(アト・ド・

フリース『イメージ・シンボル辞典』[大修館、1984] を参照。) この木の存在によって、ディクスン家の農場はイチイ農場 "Yew Nook" と呼ばれる。なお、"nook" は、"A place or spot having the character of a recess shut in by rocks, trees, etc.; a secluded or sheltered place among natural scenery" (*OED*, 2nd ed.)

3　原語の "hound's-tongue fern" の通り、舌のような形をした植物で、*OED* よると、"dog's tongue" とも呼ばれる。

4　「絵のような」は原語で "picturesque"。"sublime" などと共に 18 世紀の特に後半で理想とされた美を形容する言葉の一つで、スイスの山岳地帯に見られるような変化に富んだ風景を表す。イングランド国内で、"picturesque" と呼べる風景が典型的に見られるのは、湖水地方である。

5　原文では方言の "miserly" が使用されているが、一般に守銭奴は "miser" で、*OED* によると、"miserable" と同じ意味を表すこともある。

6　英国の詩人、John Milton (1608-74) の叙事詩で、原題は *Paradise Lost* (1667) である。なお、ディクスン家を始め、ウェストモーランドの地主の家に見られる『失楽園』以下の書籍 (注の7から 10 も参照) について、ライトは、この小説の道徳的な規範がキリスト教の精神にあることを暗示していると指摘し、さらに、この精神がスーザンの自己犠牲的な人生の根本にあることを、娘に遺言する母親によって用いられる "God's will" (63) という言葉や、第三章でスーザン自身が引用する、旧約聖書のルツ記 I:16 にある "Nought but death shall part thee and me!" (81) に見出すことができると述べている。(Wright 45)

7　Milton の叙事詩で、注の6で指摘した『失楽園』の続編。原題は *Paradise Regained* (1671) である。

8　スイス人の画家で詩人 Salomon Gessner (1730-88) の詩の英訳で、英語のタイトルは "The Death of Abel" (1758) である。

9　英国国教会の牧師、Richard Graves (1715-1804) の小説で、原題は *The Spiritual Quixote, or the Summer Rambles of Mr Geofry Wildgoose* (1773) である。

10　英国の説教師、John Bunyan (1628-88) の小説で、原題は *The Pilgrim's Progress* (1678, 84) である。

11　スーザンと白痴のウィル、そして、ワーズワスが描いたベティー・フォイとその弟という二組の姉と弟の関係については、注の2を参照。

12　イチイの木については、注の2を参照のこと。スーザンは人生の転機となる瞬間をこの木の下で迎えることが多い。